

1987 年度下半期報告書

一橋大学山岳部

目次

小雲取谷遡行	1	
内藤個人山行(雲取山)	1	
春合宿偵察・前半 (白山)	1	
春合宿偵察(穂高岳北尾根)	2	
つづら岩ユマーリング訓練	3	
プレ冬合宿(富士山)	4	
プレ冬合宿 part2(八ヶ岳)	5	
冬合宿(穂高岳北尾根)	8	
正月山行(南ア鋸岳、甲斐駒ヶ岳)	11	
赤石沢冬期登攀	12	
唐沢岳幕岩(鮎沢、井上)	14	
プレ春合宿(上州武尊岳 山スキー)	15	
春合宿(白山 山スキー)	17	
三ツ峠岩登り	20	← 三ツ峠を修正
春合宿偵察・後半 (白山)	21	
鮎沢政文 冬期登攀記録集	22	
唐沢岳幕岩(2編)		
南ア仙丈岳・岳沢		← 千丈岳を修正
黒部丸山		

1. 小雲取谷遡行

参加メンバー:小野、高橋

10月10日～11日

前夜、奥多摩駅でステイションビバークし、始発のバスで日原へ向かう。約3時間の林道歩きの後、大雲取谷に下降、遡行開始。小雲取谷出合いまで約1時間。途中ゴルジュがあり、われわれは右岸を高巻く。小雲取谷の小滝が連続し、技術的に問題になるようなところはない。源頭からのつめもそれほどのことではなくかすかな踏みあとをたどっていけば、いつのまにか小雲取山の頂上に出してしまう。雲取山頂上到着は 14:00 過ぎ。今夜は鷹ノ巣避難小屋までいき、そこに泊まることにする。翌日はお馴染みの石尾根を駆け下る。

2. 個人山行 内藤 (雲取山)

10月10日

三峰駅 7:30—太陽寺—三峰—雲取山 2:00—鴨沢 4:00

6 月に入部して以来自分にとって初めての単独山行である。いつもは連れられて行く立場で、自分で主体的に判断し、行動することはないのだが、今回はすべて自分で考え、行動するのでべつにたいしたルートではなかったが、充実した楽しい山行であった。帰りの電車での疲労感が心地よかった。また、雲取山への登りで、逆のルートを行く山内に、雲取山の山頂で小野・高橋に会った。

3. 春合宿偵察

(前半:白山、三方岩岳～妙法山～大汝山～室堂～南龍馬場～別当出会)

10 月 16 日～19 日

参加メンバー:小野、細野、山内

16 日:鳩ヶ谷～馬狩料金所～三方岩岳～モウセン平(1780 手前)

天気くもりときどき雨。今回はアプローチに北陸線経由のルートをとる。城端から鳩ヶ谷まではタクシーを使うが 11000 円もかかる。馬狩料金所までの約 1 時間の林道歩きの後、登山道(馬狩に落ちて来る尾根を登る)に入る。料金所出発は 9:50。かなりの急登。三方岩岳頂上 13:00。そこからさらに進み、モウセン平で幕営。15:20。

17 日:モウセン平～妙法山～ゴマ平避難小屋

台風接近、暴風雨。テントの中は洪水になり、ずぶ濡れになる。おまけにテントのポールまで折られる。風が強くて動けないため、待機。8:20。少し風がおさまったので出発。妙法山の細い稜線では吹き飛ばされそうになる。12:20 ゴマ平避難小屋着。

18 日:ゴマ平～間名古の頭～大汝山室堂～南龍避難小屋

台風一過の好天。6:45 出発。間名古の頭は北側斜面をトラバース。北弥陀ヶ原の広い尾根を経て、大汝山への登りにかかる。夏道は谷筋。けっこうしんどい。大汝山 11:20。大汝山で一服したあと、室堂に下る。室堂 12:05。ここまで来ると人でいっぱいだ。室堂の小屋にはデホは置けないとのことなので、南龍避難小屋まで行く。ここにデホを置き、今夜はここで泊まることにする。13:20。南龍小屋は新しく立派である。

19 日:南龍避難小屋～別当出会

銚子ヶ峰まで行くつもりであったが、低気圧の異常発達、寒冷前線通過のため雨。出発を見合わせる。結局最短コースをとり、別当出会に下山する。出発は 11:00。別当出会到着は 12:20。悪天にたたられ、悲惨な山行。

4. 冬山偵察山行

10 月 18 日～22 日

参加メンバー:斉藤、河野、内藤

18 日:6:20、上高地出発。天気は快晴。荷物もそれほど重くなく、徳澤まで順調に進む。徳澤 8:00。徳澤から新村橋を渡り、慶応尾根の取り付け点へ。取り付け口は赤布がたくさんあり見付けやす

い。そこにまた赤布を付け、急斜面を登る。ヤブコギを覚悟していたが、踏みあとがしっかりしており、難なく進む。2154 からの下りは、重荷なら危険そうである。また 8 峰の手前の斜面も、雪崩の可能性あり。3:00. 8 峰着。8 峰頂上は幕営適地。4:00 涸沢着。

19 日: 天気は雨。沈と決定。

20 日: 前日の雨が雪となり、一面の銀世界に。沈。

21 日: 天気は少し回復。前日の雪が 20~30cm の積雪となる。ピッケル、アイゼン等の装備を全く持っておらず、どういうルートをとる、どこを偵察するか検討する。屏風の科尔から 8 峰、5・6 の科尔 or 3・4 の科尔まで行くということになる。屏風の科尔までの道もところどころアイスバーンになっており、怖い。屏風の科尔から 8 峰へはハイマツ帯となっており、難なく進む。7 峰への登りはザイルを出す。この雪でアイゼンなしは苦しい。6 峰の登りで 3 ピッチ。しかしあと数ヶ所、本番ではザイルを出したほうがいい場所があった。11:00、5・6 の科尔着。この装備で 1 年生がいることもあり、3・4 の科尔へはあきらめ、涸沢にへ下る。涸沢でテント撤収、ザイテングラードを登り白出の科尔へ。冬期小屋の前に幕営。

22 日: 天気晴。昨夜は寒さのためみなあまり眠れなかったようである。また靴が朝ガチンガチンに凍ってしまった。6:30 出発。涸沢岳への登りは風が強い。涸沢岳西尾根への分岐点はすぐである。西尾根は滝谷側に鋭く落ち込んでいる。ここで 2 ピッチザイルを出す。雪は風に飛ばされるせいか、あまりない。蒲田富士を過ぎると樹林帯へ入る。ここでは頂上の寒さと風の強さがウソのようである。11:00 新穂高温泉着。

5. つづら岩ユマーリング特別訓練集会

冬合宿に向けて我々はユマーリング習得の必要を感じ、ユマーリングに熟知している鮎沢氏を招いて、小雨降る中、つづら岩にて特訓を行った。

日時: 11 月 8 日 (にわか雨)

場所: つづら岩

参加メンバー: 斉藤、外池、河野、小野、井上、山内、内藤、高橋、

特別講師: 鮎沢

尚、雨だったので、中止と勘違いした細野は来なかった。

<感想>

ユマーリングの難しさ、コツが分かり有意義であったと思う。また、その後のアイゼンを付けての岩登り練習がためになった。(内藤)

<謝辞>

私こと細野伸二は、個人的事情により集合時間に遅れ、あまつさえ雨天を理由に勝手に中止して、部員の皆様に多大なるご迷惑をお掛けしました。ここに遺憾の意を表し、深く陳謝するものであります。

6. プレ冬合宿 (於、富士山)

(' 88.11. 22~25)

参加者: (4 年) 齊藤、外池、河野 (3 年) 小野、高橋 (2 年) 井上、細野、山内 (1 年) 内藤

構成: (A) 河野、井上、細野 (B) 外池、山内、内藤 (C) 齊藤、小野、高橋

行動記録

21 日(土): AB の 6 名、夜行で立川発、富士吉田駅にてビバーク。

22 日(日): (AB) 富士吉田~五合目佐藤小屋~吉田大沢七合目~TS

早朝、富士吉田駅を発ち、吉田口登山道を経て、3 時間で佐藤小屋上のテント場へ。テント設営後、吉田大沢の雪訓場所へ向かう。雪訓後、A の 3 名はビバークのため八合目へ向かい、B の 3 名は帰幕。

(C) 立川発、富士吉田にてビバーク。

23 日(月): (AB) TS~七合目雪訓場~TS

(C) 富士吉田駅~TS~雪訓場~TS

A がビバークを終え、七合目まで下るが、寝坊した B の 3 名が上がってきた 1 時間後の 8:00 であった。通常の雪訓を終えた後、八合目小屋脇の岩場にてユマール登攀の訓練。そのころには C の 3 名も七合目に着いて、雪訓を始める。訓練終了後、全員で帰幕。B の 3 名はビバークのため六合目に向かう。

24 日(火): (AB) TS~吉田七合目~頂上~TS~下山

七合目小屋付近より吉田大沢下部をトラバースして屏風尾根に取り付く。末端のルンゼをつめ、岩くずの多い尾根上に出る。かすかなトレールに従って登高していくと、左下に吉田大沢の景観が拡がる。ルートはやがて大沢の右端の断崖に沿うようになり、程なく山頂の一角の鉄塔のあるピークにとびだす。大休止後、一般道にて TS まで下降。テント撤収後、富士吉田へ下山、帰京。

(C) TS~七合目雪訓場~TS~六合目 BS

終日、雪訓。帰幕後、ビバークのため再び六合目へ。

25 日(水): (C) TS~吉田七合目~頂上~TS~下山

昨日の AB に続いて、屏風尾根より頂上へ。午後下山。

7. プレ冬合宿 Part2 (ハケ岳)

12 月 3 日(木)~7 日(月)

普通ならばプレ冬合宿は富士山合宿 1 回だけなのだが、今回の冬合宿は穂高の北尾根を狙うので、登攀要素が例年になく強くなるため、第二次プレ合宿を設け、冬期登攀技術、ユマーリング技術を実践の場で訓練した。

場所: ハケ岳

参加メンバー: 齊藤(CL)、外池、河野、井上、山内、内藤、高橋

飛び入り参加: 引地(OB)、鮎沢(前部長 5 年生)

なお、齊藤(PL)、外池、内藤、高橋———A 隊

河野(PL)、井上、山内———B 隊 とする。

また、小野は家庭の事情、細野は風邪のため、この合宿には参加できなかった。

日程

2日(水):

[A 隊]夜行発

3日(木):晴

[A 隊]6:20 県営スキー場入口～7:30 川俣川 7:45～10:05 赤岳沢・天狗尾根取り付き 10:20～(途中 2P fix)～4:30 大天狗手前でビバーク

この日のうちに赤岳鉱泉まで行くという予定であったが、計画段階でムリがあったようだ。大天狗手前でビバークを強いられた。また、チョンボなことに、米やスベアを忘れてしまった。夕食はメタで、ペミカン入りスープを作った。食当の細野が急に来られなかったことや、実働 3 スベア 1 という小さな合宿だったことからミスが生じたのか。なかなか悲惨なビバークとなった。

[B 隊]夜行発

4日(金)雪

[A 隊]6:00 起床 7:50 発～(2P fix)～11:00 行者小屋 11:30～12:00 赤岳鉱泉

朝食はお楽しみで持ってきた缶詰だった。

(斉藤の記録より)「またしても寝過ごしてしまった」(4:30 起床のはずであった)「この頃はどうも初日の朝が弱い。風は強くないが雪が舞っている・・・」

この日は天気が悪かったようだ。

[B 隊](記録がない！！)

概ね 12 月 3 日の A 隊と同じだが、清里からタクシーで入山。(冬の清里はサビシイ)A 隊よりも行く分早く登山開始となっていたはず。しかあし、赤岳沢天狗尾根取り付きを、少々沢を深く入り過ぎてまちがえ、消耗の強いヤブこぎとなり、ようやく尾根の上に出た。途中ザイルを出し(大岩峰は右からまいた—A 隊は左からと言っていたが)やはり A 隊と近い場所でビバークとなり、失意のビバークとなる。狭い稜線上での設営は、おりからの強風で、夕暮れ時とも相俟って困惑気味。ダンロップテントのポールを何本も谷に落とす。A,B 隊ともに天狗尾根では苦戦。

5日(土)晴

[A 隊]4:00 起床 6:00 発～7:30 大同心右稜初 fix 箇所 7:45～1:20 横岳主峰 1:40～3:10BC

快適な岩登りだった。小同心基部から 4 人の後続パーティーにつかれ、気ぜわな登攀となった。

[B 隊]赤岳鉱泉にかなり早い時間に到着。引地 OB がおられた。人のいない A 隊のテントの外に転がっている空缶を見て、「昨晚の我々とは大違いの豪華な食事だったにちがいない」と誤解する。

6日(日)雪 pm2:30 より晴

4:00 起床 6:30 出発～8:00 中山尾根下部壁基部～2:30 登攀終了～4:00BC

(A 隊、4:50BC 発～6:30 美濃戸口)

本日は全員で中山尾根へ行く。リード、fix、登攀、ユマーリング、ザイル回収の繰り返しを、ルート工作隊、回収隊などの分担を定めて、機能的に行う。昨晚からの雪は降り止まず、10cm 以上積も

り、朝方は出発をためらう。実際、雪のちらつく中、風も断続的に吹き、厳しい登攀となった。またしても 2 人のパーティーにつかれ、7 人の大パーティーであるため、すまなく思うが仕方がない。1P 目の fix でラストの齊藤は約 2 時間待つ。下りは地蔵尾根。この頃になると天気も回復し、よく晴れた。隊の編成は、外池、河野、井上が工作隊、ユマーリングは 1 年の高橋、内藤の 2 人。しんがり は齊藤が指揮して、ザイル回収を行う。

BC に着くと、鮎沢が来ていた。A 隊はすぐ下山。ちなみに内藤は翌日フランス語の試験であり、分厚い参考書を持っての入山を果たすも、翌年 5 月 11 日現在、いまだ履修は果たされていない。ユマール、ポリタン各 1ヶ見当たらず、道具の管理の乱れがはげしい。

7日(月):快晴

A 隊 + 鮎沢での行動。鮎沢の提案で、鮎沢、山内は大同心雲稜ルート、河野、井上は小同心クラックへ。

この日はよく晴れ快適な登攀日和。小同心隊は危なげなくこなし、昼ごろ稜線へ。大同心隊が見え、呼び掛け合う。大同心隊は山内にとって困難であったらしく、彼のズボラさもあって、彼は指に凍傷を負う。このため彼は冬合宿に行けなくなり、反省が行われる。BC には小同心隊の方が 1 時間位早く着き、この日のうちに下山。赤岳鉱泉では明るかったが美濃戸口ではすっかり日が暮れていた。

この日は月曜なので人は少なかったが、中島正宏氏が来ていた。彼は翌週末、大同心雲稜ルートをソロで登攀中転落、帰らぬ人となった。(文責:井上)

8. 冬合宿報告書 (穂高岳北尾根)

参加メンバー:齊藤、外池、河野、小野、井上、細野、高橋、内藤 (山内は凍傷のため不参加)

12月16日:上高地~徳澤~1798地点

雪。5:55 沢渡を出発、冬合宿のスタートである。例年のない暖冬の様で、上高地まで積雪はほとんどなし。快適に進み 9:00 には帝国ホテル前に達する。“上高地街道”をたどるが、夜行の疲れが出て、眠い。明神池付近から雪が深くなり、スパッツをつける。11:30 徳沢着。吊橋を渡り、川原をしばらく歩き、12:35 慶応尾根末端に着く。やはり雪はほとんどない。稜線への急登は重荷を背負っているのが非常にこたえる。13:20 やつとのことで 1798 地点に到着。この先 2154 地点まで進むか幕営かで迷うが、結局幕営。

17日:1798地点~慶応尾根~8峰頂上

天気図は冬型の気圧配置を示し、雪。しかし、8峰目指し 6:35 出発する。一晩でかなりの積雪があったらしい。2154 地点手前辺りから雪深くなり、ダブルボッカでなければ進めないところも…。ワカンを持ってきて助かった。猛ラッセルのため、予想以上に時間を食う。昨日 1798 地点で幕営したのは正解であった。14:00 頃、北尾根上に出る。風は冷たく、震えあがる。眼下には涸沢が、対岸には奥穂高岳の雄姿が、そして目指す白出のコルが、一望に見渡せる。15:50、8 峰着、ここで幕営。8峰上は船窪地形をなしなかなかよい幕営地である。雪のため行動時間は 9 時間にもふくれあがった。日入り果てて空は満天の星。遠く街の灯がゆれる。眼前には北尾根の岩峰がピラミッド

の感を呈して立ちはだかる。明日からの登攀を前に胸は踊る。

18日：8峰頂上～5・6の科尔(工作隊は5峰まで)

移動性高気圧にスッポリ覆われて快晴。6:40 出発。北尾根上でもラッセルはかなりしんどい。7峰の緩い雪壁でまずザイルを出す。6峰の登攀は4ピッチ。特に下部はかなり急登で高度感もあり、なかなか手強い。14:00 第一陣が5・6の科尔に達する。全員が揃うのは1時間程度後。ここで幕営。14:45 工作隊出発。5峰まで行き、雪壁に2ピッチフィックスし、16:45 帰幕。

19日：5・6の科尔～3・4の科尔(工作隊、3峰にfix)

弱い冬型の気圧配置となり、雪、後強く降る。6:35 出発。工作済のルートでは順調に進み、特に問題無く全員4・5の科尔に着く。ここから4峰へはやせた雪稜が続き、少し緊張する。4峰の登攀は涸沢側から登り、2ピッチ。特に下部岩壁では危ないトラバースがあり、難儀する。ここを某S氏はザックを背負ったままリードしてしまったのだから驚く。10:45 第一陣が3・4の科尔に到達。天候は悪化しはじめ、ついに吹雪になる。この悪天の中、フォロー隊の到着が大幅に遅れ、斉藤が心配して迎えに行く始末。全員が揃うのは12:45。この間、13:15に工作隊出発。3峰の頭まで1ピッチを残して17:00頃帰還する。このときテントでは“事件”発生。こぼれたガソリンに引火しあわやテント消失か、という事態に。もうひとつミスが出る。調理用のコッヘルが吹き飛ばされ、翌朝大騒ぎをすることになる。中間地点まで来た安堵感から来る気の緩みが災いしたのであろうか。幸い最悪の事態には至らなかったが、これは大きな反省材料である。工作隊の話によれば、3峰の登攀は予想以上に難しそうだとのこと。1ピッチ目には小ハングがあり、ユマールを2つ使わなければ登れそうもない、とのこと。協議の末、全員ユマールを2つずつ使い、5人登った後、1人がユマールを持って下降するといった方法をとることにする。

20日：3・4の科尔～前穂高岳頂上

冬合宿のクライマックスを迎える。今日は核心部の3峰を越える。雪。6:40 工作隊出発。後発の者はツェルトをかぶって待つ。思ったとおり1ピッチ目の小ハングで苦労する。2,3ピッチ目にも急な登攀が続く。厳しい冬のヴァリエーションルートを前に隊のスピードは上がらず、後発の者は長時間待たされる。この間にも降りしきる雪は一向に止む気配を見せない。4ピッチ目にもハングがあり、アブミをセットする。それでも重荷なのでやせた岩稜が続き2ピッチフィックスをはる。懸垂下降する箇所もある。16:00 前穂頂上着。風強く、ブロックを積み、幕営。一時はどうなるかと気をもんだが、無事核心部を越えた。その夜一方のテントでは遅くまで騒ぐ。

21日：前穂高岳頂上～吊尾根～奥穂高岳～白出の科尔(穂高岳山荘)

雪は止まず、視界も良くないが、6:50 出発。稜線を外さないように慎重に行動する。積雪直後の雪は締まりがなく、表層ナダレの危険もある。悪天の中ペースは上がらず焦りの色を隠せない。4時間連続で行動し、12:20 になってようやく奥穂高頂上到着。安堵する。夏の吊尾根からは想像できないほど厳しい道程であった。そのまま白出の科尔目指して下りはじめるが頂上直下の下りで高橋が滑り、一瞬ヒヤリとする。後向きになるなど慎重に下っていれば防げたはずのものであった。科尔手前のハシゴがなかなか見つからず、4年生が偵察する。13:50 白出の科尔到着。雪に埋もれた冬期小屋を掘りだし、今日は小屋泊まりとする。便所まで備えつけられた小屋は厳しい風雪に

さらされてきたわれわれにとって、まさに天国であった。ただ長時間かけなければ掘り出すことのできない入口は、冬山を知り尽くした者にのみ可能な設計ということができよう。夜、全員が集まりミーティングを行うが、今朝の天候判断、高橋の滑落未遂等について、疑問が出される。結果的にはうまくいっているのだが、今後に大きな課題を残した。

22日：白出の科尔～涸沢岳西尾根～蒲田富士～新穂高温泉

待望の最終日。快晴。われわれが越えてきた北尾根の稜線が、前穂高岳が、そして眼前に立ちはだかる奥穂高岳が、雲ひとつない夜明けの空にくっきりと浮かび上がる。6:40 出発。一気に涸沢岳に達し、西尾根の岩稜を下る。F 沢の科尔への下りは懸垂下降を行う。F 沢の科尔は 9:00。蒲田富士の雪稜を雪庇に注意しながら進む。途中涸沢岳を目指すパーティーとすれ違う。蒲田富士の下りもやや難しい岩稜があり、2 カ所懸垂下降を行う。そこを抜けると樹林帯に入る。ここまでくれば安心。天候も昨日の吹雪がうそのように穏やかである。13:00 ひょっこりと林道に飛び出す。そこからは一気に歩き、14:40 ついに終点新穂高温泉に到着する。入山以来 1 週間目、まさかとは思ったが 1 日の沈滞もなしに完走である。

今回の冬合宿は 4 年生にとって最後の合宿となる。近年部員不足に悩む山岳部にあつて 3 人のつぶぞろいのメンバーという好条件に恵まれたせいもあり、質量共にかなりのレベルの山行をこなしてきたわけであるが、今合宿は 4 年間の集大成としての意味合いの強いものであった。そういった意味で、冬の北尾根を攻略出来たのは大成功であった。とりあえず、ごくろうさまでした。

しかしいくつかの反省材料も残した。先ず問題になるのは 21 日(吊尾根)の行動である。出発時の天候判断に問題はなかったか？また奥穂高頂上直下での滑落未遂もこの日起こっている。そしてガソリン引火やコッヘル紛失等の初歩的ミスも見落とせない。幸いにして今回は大事には至らなかったが、山ではひとつ間違えば大事故につながりかねないということを肝に銘じて今後の糧としたい。

最後に特筆せねばならないのは、今回改めて確認した冬期登攀の難しさであろう。「予想以上に手強かった」というのが率直な実感ではなかろうか？しかし何はともあれ成功である。だがこの成功の背景には、つづら岩、富士山、八ヶ岳といった一連のトレーニング山行があったことを忘れてはならない。このことは事前の綿密な準備と十分な訓練の重要性を物語る。そしてかりそめにも冬の岩壁を甘く見るなら、手痛いしっぺ返しを食らうであろうことを、冬山に登るものなら忘れてはいけない。12 月の北尾根を走破し、爪の擦り減ったアイゼンは、今後の飛躍への証左である。

9. 正月山行

時：S62.12.30～63.1.2

場所：南ア 鋸岳～甲斐駒ヶ岳

参加：引地、細野

62.12.30：雪

富士見駅—釜無川林道—横岳山頂 TS

駅からタクシーで釜無川の林道を入る、途中、つがいの鹿が車の前に立ちふさがる。タクシーを降りて 30 分ほど歩くと林道も終わり、そこから沢沿いの道を飯場へ向かう。道が不明瞭なのでいい加減に横岳より延びる小尾根に取り付く。強風の中を急登 2 時間で山頂につき、わずかな雪の上にテントを設営。

12.31:晴

TS—2600mP—第一高点—第二高点—中ノ川乗越 TS

信州側からの吹上げが 10 時まで続く。2600mP からは道も良くなり 11 時前に第一高点に至る。ザイルを出し、小ギャップ、大ギャップを懸垂で下る。底についても陽の当たるところはまるで雪がなく、5 月にきた時と変わらない。第二高点からは甲斐駒のながめを楽しむ。中ノ川乗越には 1 時すぎに着き、シュラフを乾かしてからゆっくりテン場を作る。

1.1

TS—熊穴沢の頭—六合目—甲斐駒ヶ岳山頂—八合目 TS

眼が覚めたときには南向きの岩壁がオレンジに輝き、新年がとうに明けた事を教えてくれた。アイゼンを着け昨日同様戸台側からの強い吹上げの中を出発する。速いピッチで六合目に着き、ここでアイゼンを外す。雪のない道を山頂に向かう。10:30 に山頂着。TS からわずか 3P で来てしまった。充分眺望を楽しんだ後、黒戸尾根を下る。今日は八合目止まりとし、早々にテントにもぐりこむ。

1.2:晴

TS—七合目小屋—駒ヶ岳神社—葎崎

陽の射さない道には去年の雪が残り、よほど正月の山らしい。正面の八ヶ岳は三日間の観察によると日に日に雪が消え、今ではまるで夏山と変わらない、黒々とした姿を見せている。バス停でビールを飲みながら振り仰ぐと、山の頂に雲がかかり、三日続きの晴天も今日で終わりのようである。

(63.5.18 細野 記)

10. 赤石沢

A フランケ・B フランケ・奥壁継続登攀

日時:1988 年 1 月 5 日～10 日

場所:甲斐駒ヶ岳赤石沢 A フランケ:下部白稜会・上部赤蜘蛛

B フランケ:赤蜘蛛

奥壁:中央稜

参加メンバー:鮎沢、井上

5 日:晴のち雪 日野春駅～8:00 横手バス停～9:00 神社～17:05 無名岩小屋(八合目岩小屋下)
この日は入山だけである。黒戸尾根の登りは長く、とくに井上はへろへろになり、鮎沢に遅れる。八合目小屋は使われており、少し左手の谷に下り、別の岩小屋に泊まる。

6 日:晴 7:20 出発～9:45 登攀開始～14:00 前後大ハング～20:00A フランケ頭岩小屋(終了)

たいへん天気がよく、氷も融けだし、ザイルが濡れもした。この日は A フランケを登る。赤蜘蛛ルー

トを追うつもりだったが、取り付きを間違えて、下部白稜会、上部赤蜘蛛ルートとなった。快適な登攀日であったが、ボルトラダーのピッチが多く、上部クラックでは両者へロへロになる。恐竜カンの辺りで日が暮れ出し、Night Climbing になる。甲府の夜景がきれいだが、井上は暗い中でザイルの繰り出しにてこずる。最終ピッチを終えると、ひょっこりAフランケ頭の岩小屋に出る。9割方、鮎沢のリード。

7日：晴、途中から雲出現 7:20 出発～8:00 登攀開始～13:50 第二バンド～16:30 終了～17:25Aフランケ頭岩小屋。

B フランケ赤蜘蛛ルート登攀。天気はよかった。鮎沢のリードの際、氷に埋まったボルトを掘り出すのに苦労する一幕もある。終了前のトラバースのピッチはアイゼンでは登りにくく、サカンドの井上がアブミをかけたハーケンが抜け、ザイルにぶらさがるなどの場面もあった。そのピッチの振り子トラバースも悪かった。鮎沢がほとんどリード。帰り、八合目岩小屋に登攀具をデポ。

8日：雪 沈殿

疲れをいやすのに丁度よかった。井上は中国語の暗証テストの暗記等をする。鮎沢の用意してきた食事は、量は決して多くはないが、細かい所に心配りが見られ、手が込んでいた。紅茶、コーヒーの多いこの山行で、シナモン・スティックは光った。明日は奥壁をねらうが、できたら左ルンゼに行きたいものだと、アイゼンの前爪を研ぐ。

9日：雪 5:10 出発～5:50 無名岩小屋(15分位待機)～7:00 八合目岩小屋(準備)～8:45 登攀開始～15:15 登攀終了～16:30BP(終了点より10分位登った地点)

奥壁登攀に向かう。天気が悪く、中央稜をねらうことにするが、雪の積もった量が予想外に多く、無名小屋で暫時様子を伺う。風はないものの雪は止まない。八合目岩小屋では、あまりのラッセルのたいへんさに一度は断念する。しかし、なんやかんやで進むうち、雪の状態もそれ程悪くないこともわかり、取り付きを目指す。ルンゼトラバースでは井上は雪崩の恐怖を拭いきれず、ザイルを出して取り付きに着くも、鮎沢と衝突。とりあえず登れそうなので、登攀開始。かなり壁の状態は悪く、リードの鮎沢も苦戦を強いられたようだ。嘔ませたフレンズも AOもした。手袋もすぐ濡れた。A・B フランケに比べ、登攀のスピードは格段に落ち、この日のうちに壁は抜けられたものの、稜線に出るにはヘッドランプ行動になりそうだったので、小さな尾根上に出た所でビバーク。ブッシュの間に二人が足を伸ばせるだけの穴が掘れ、ツェルトを張って泊まる。食糧はあまり持ってきておらず、シュラフを八合目に置いて来たため足先が冷たく眠れなかったので、寒い・ひもじい・眠いの三重苦。ガスカートリッジに余裕があったので、炊き続ける。何故か少量のウィスキーがあったのでお湯割りで飲む。一睡もできず、長い夜だった。

10日：雪ときどき曇り 7:15 出発～8:45 稜線～9:00 頂上 9:15～10:20 ごろ八合目岩小屋 11:30～12:25 七丈目小屋～13:20 五合目小屋～17:20 横手バス停

眠れぬ夜を明かして、明るくなり始めてから動き出す。頂上で継続登攀終了の安堵に浸るのも束の間、腹までの雪をエンエンとラッセルすることになる。七丈目小屋手前で他のパーティーとすれ違うまで行く。下りとはいえ、しんどかった。黒戸尾根は長く、横手のバス停に着く頃は辺りは暗くなっていた。帰り道で見た八ヶ岳の勇姿は堂々としており、限りなく立派だった。

11. 北アルプス唐沢岳幕岩

参加メンバー: 鮎沢、井上

期間: 井上 2月12~13日

場所: 唐沢岳幕岩(畠山ルート)

記録:

12日: 晴 9:13 信濃大町 9:25~10:06 葛温泉~七倉ダムで鮎沢と合流~大町の宿

13日: 晴→くもり→地吹雪 畠山ルート取り付き 8:15~3P 終了後敗退 1:00~2:00 取り付き~大町の宿 3:00~(下山)

この山行は、鮎沢が単独で幕岩に籠もり、3本登る予定のうち、2本目だけ井上に加わって登るというものであったが、鮎沢が9日、単身乗り込んだときは壁の状態が極端に悪く、単独で登るのは危険と判断し、井上との合流を待つ。しかし合流してから、登れると思って取り付いた畠山ルートも予想のほか壁の状態が悪く、昨年GWに来た時と同じ地点で、又も敗退してしまった。時間切れで井上はこの日のうちに下山を決めたが、鮎沢もソロで登る気は無くなっており、一緒に下山したのであった。結局鮎沢はこの大計画の中、1本も登れなかった。

12. プレ春合宿報告書 (尾瀬~上州武尊岳)

3月23日~28日

23~25日 尾瀬戸倉スキー場にて滑降練習

ブルークボゲン等スキーの基本技術を各自練習。25日はシールを付け、登高・シールを付けての滑降の練習を行う。なお、某女子体育大学のスキー研修生といっしょになり、ゲレンデの雰囲気似つかわしくない我々が彼女たちの颯爽を買う一幕も……。それにしても女子大生の宿舎の真後ろにテントを張るとは何事か。

25日: 尾瀬戸倉スキー場~鳩待峠

晴。ゲレンデを数回シールを付けて登り下りして感覚を養った後、縦走に出発。10:15 スキー場発。林道を鳩待峠へと向かう。林道には下から積雪があり、スキーを付けて歩く。重荷を背負って歩くことを思えば、スキーはいくぶん有利であるが、林道歩きの単調さにはやはり変わりはない。鳩待峠には15:35到着。

26日: 鳩待峠~笠ヶ岳~坤六峠

6:00 出発。稜線を快適なシール登高。悪沢岳は南側斜面をトラバース気味に巻くが、これが結構悪い。表面がクラストしており、スキーの初心者にとっては少々怖いところ。しかし経験者が雪面を強く踏み付けてステップを切ることで解決。異様な形の笠ヶ岳を右手に見て進む。坤六峠方面への尾根はすぐに見つかったが、視界が悪ければ注意が必要なところだろう。ここからは下りがちになるが、スキー初心者である我々は、登りよりむしろ下りで手間取る。おまけにこのころから気温が上昇して雪が腐ってきたため、シールに雪が付いてしまう。とくにモヘヤシールは悲惨であった。15:35 坤六峠到着。この夜、内藤は雪洞で泊まる。

27日: 坤六峠～西山～武尊田代～分岐点、武尊岳空身で往復

雪のちくもり。下山パワーで一気に下山との噂もちらほら聞かれたようであるが、朝、雪が降っており視界も悪かったので、一時出発を見合わせる。7:00、雪は降り続くが陽が昇り視界がある程度きよくなったので、出発。西山への稜線を、赤布を付けながら進む。稜線に導かれ、何となく迷わずに西山を通過することができた。西山からの下りは適度な傾斜で、昨夜降り積もったバージンスノーを実に快適に滑る。武尊田代は山スキーのためにあるようなものだ。赤布に導かれていけば迷うことはない。一時間あまりで田代を抜け、武尊岳と武尊牧場スキー場への分岐点に着く。12:20。ここで幕営し、空身で武尊岳を往復することにする。一時間ほどで頂上直下に達するが、急斜面のトラバースでしかも雪崩の危険が非常に大きいことから、ここで引き返すことにする。この稜線は小さなアップダウンが連続するので、シールを外しての滑降には適さない。テントサイト帰着は 15:15。

28日: 分岐点～武尊牧場スキー場

晴。今日は最終日で、しかも行程も短いことから、ゆっくりとし、8:00 出発。全員シールを外して滑降。途中一ヶ所登り気味の所もあったが、全体として快適な滑降を楽しめた。やがて人人人でごったがえす日曜日の武尊牧場スキー場に突入。軽快にとばすスキーヤーを横目に、重荷を背負った我々は初心者コースをブルークボーゲンに終始する。10:15 スキー場のいちばん下に到着。

今回我々は山スキーは初体験であったが、ゲレンデでの滑降練習、荷物を背負っての小縦走と、当初の目的はほぼ達成されたと言ってよいだろう。だが、我々はまだスキーの初心者であることもあり、登高よりも滑降のほうが手間取る一面もある。スキーが本来もつ機動性を生かしたスキー山行を行うには、ゲレンデスキーも含めてまだまだ練習が必要だと実感した。用具については、モヘヤシールはナイロンに比べて雪が着きやすいことがわかった。

今回の山行ではアイゼン、ピッケルももっていったがまったく使用しなかった。また登高に際してもおおむねシール登高が可能である。このようなことから、尾瀬および上州武尊岳は絶好の山スキーフィールドであるといえよう。

13. 春合宿報告書（白山、三方岩岳～大日岳）

3月16日～24日

16日: ～馬狩料金所

この日はアプローチで一日つぶれる。東海道線、高山線と乗り継ぎ美濃太田へ、ここから第三セクター長良川鉄道で美濃白鳥へと向かう。白鳥からはバスに乗り継ぎ鳩ヶ谷へ。鳩ヶ谷からは馬狩料金所（白山スーパー林道）まではおよそ1時間の歩き。料金所手前を除けば道路にほとんど雪はない。今日は料金所前にテントを張る。なおアプローチには、北陸線を経由し城端から入る方法もある。

17日: 馬狩料金所～三方岩岳

晴のち雪。いよいよ今日から白山の長大なスキー縦走が始まる。取り付きは、馬狩に落ちて来て

いる尾根の末端から取り付くか、スーパー林道を途中まで歩くかが問題になるが、早朝のため雪崩の危険も小さいであろうことから、スーパー林道をたどることにする。出発 5:45。林道をシールを付けて歩き、8:00 ごろ尾根の末端(夏の登山道の入り口)に着く。ところどころ急登のある尾根をラッセルしながら進む。上部では雪が堅くアイゼンを使用する。10 時過ぎ頃から雪が降り出し視界が悪くなる。三方岩岳頂上直下に来ているはずなのだが、はっきりしない。それに右側が切れ落ちているため、雪庇踏み抜きの危険もある。そのため偵察隊を出し、頂上直下の雪壁がすぐそこにあることを確認。三方岩岳西側の雪壁は降雪直後には雪崩の危険が大きいため、この日のうちに越えてしまうこととする。ピッケルを用い、キックステップで雪壁をトラバースする。三方岩岳頂上に全員が揃うのは 12:10。この先進むかどうかで迷うが、雪が降り続けているため、無理をせず幕営することにする。白山の雪は水分を多量に含んでいて、まるで雨にあったように濡れる。

18日:三方岩岳～野谷荘司山～モウセン平

雪。朝、雪のため出発を見合わせる。9:00 ようやく出発。小さなアップダウンの繰り返しがつづく稜線をたどる。特に危険ヶ所はない。11 時頃 1704 ピークを通過。その後、野谷荘司山手前で、視界が悪いため主稜線を外してしまう。間違いに気づき軌道修正するが、所要時間は大きくふくれあがる。何とか主稜線に戻り、14:10 モウセン平に着く。ここで幕営。

19日:モウセン平～妙法山～間名古屋の頭手前

晴。5:50 出発。引き続き主稜線をたどる。今日は妙法山を越えるが、妙法山の登りは傾斜がきつく、スキーを外して登る。妙法山頂通過は 7:30 頃。下りはおおむねスキーで滑降出来る。ただ、妙法山直下にクレバスがあり、約 1 名それにはまってしまった。その後、ゴマ平方面分岐点までは特に問題はない。分岐点からは夏道は主稜線を外れゴマ平経由で行くが、我々は主稜線づたいに行く。間名古屋の頭に近付くにつれ傾斜が増し、ついにはスキーでは登れなくなる。特に最後の急な登りは氷化した上に雪が積もっており非常に苦労した。間名古屋の頭手前の平坦地に 13:20 到着。ここから先進むかどうか協議するが、明朝雪の堅いうちに一気にアイゼンで越えてしまうほうが有利と判断し、今日は早々と幕営。

20日:間名古屋の頭～大汝山～室堂～南龍避難小屋

晴。6:05 南龍目指して出発。昨日は間名古屋の頭越えはかなり長丁場であると思っていたが、実際にはそれほどでもなく 1 ピッチで通過。ここから北弥陀ヶ原の長い登りが始まる。傾斜は比較的緩くシール登高向きの斜面と言えるだろう。ルートは稜線よりも左側を取るのがよいようだ。しばらく進むといよいよ目指す大汝山が現れる。このころからだんだん傾斜がきつくなってくる。大汝山への登りは、夏道は谷筋を通っているが、積雪期には雪崩の危険があり使えない。我々は、大汝山に直接突き上げる県境の尾根を取る。かなり傾斜がある細い尾根で、もはやスキーの領域ではなくアイゼンを付ける。重荷にあえぎながら、それでも滑落と雪崩の誘発に注意しながら慎重に登る。12:00、ついに尾根を登りきり、大汝山頂上に立つ。苦しい登りの末に白山の主峰に立ち、我々は今合宿最大の充実感を味わう。

大汝山頂上で大休止を取った後、いよいよシールを外して滑降である。が、これまでシールに慣れてきた我々はシールを外した瞬間、おもわず転倒してしまった。しか、スキーの本領はシールを

外したときにこそ発揮される。(はずである)。ひさびさの快適な？滑降。ルートは、最初はトラバース気味に行き、右手前方に室堂の小屋を確認してから室堂目指して一気に滑り下るのがよい。室堂通過は 13:30。進路を南にとり、デポの待つ南龍避難小屋を目指す。室堂から南龍への斜面は絶好のスキーフィールドだ。(ただし南龍付近は深くもぐり、てこずったが)写真撮影会などして楽しむ。ところが、4 日間夢にまで見たパラダイス南龍避難小屋についてみると、予想だにできなかった事態に直面した。小屋の入口が開けっぱなしになっており、小屋の中まで雪が吹き込み、入口が完全に埋まってしまっていたのだ。一時は、小屋が使えないばかりかデポも回収できないのでは、と思われたが、2 メートルほど掘れば、その先は埋まっただけで、小屋に入ることができた。最悪の事態は免れたが、特に冬山に登る人なら小屋の管理ぐらいしっかりしてほしいものだ。

21 日夜半～22 日にかけて低気圧通過、雨が降ったため、2 日間小屋で沈滞。

23 日：南龍避難小屋～別山～三の峰～銚子ヶ峰～丸山手前

晴。2 日間の休養で鋭気を養った我々は、これから今合宿の後半戦に入る。6:20 出発。シールを付けて出るが、クラストしているためシールがきかない。そのため早々とアイゼンに切り替える。我々の場合、スキーよりもアイゼンの方が速いようだ。2 ピッチで別山を越えてしまう。別山を越えてひと安心といったところで、「事故」が発生。別山からの下りで井上が滑落、ピッケルを持っていなかったためなかなか停止できず、ブッシュに引っ掛かりやとと止まる。あわや大事故につながる場所であった。引きずっていたスキーの上に乗ってしまったことが原因らしい。また、強風の中、下りを急いだことも誘因となったようだ。これに関し、幾つか反省すべき点がある。スキーを引きずるのは、特に下りの場合このような危険がある事を知っておくべきである。さらに、最も重要なことは、スキーを外して歩くときには、必ずピッケルも手に持つという原則を確認しなければならない。依然として雪は堅く、引き続きアイゼンで行く。10:00 には早くも三の峰小屋を通過するというハイペース。二の峰を越えたあたりからようやくスキーを使う。しかしこのころからガスが湧いてきて視界が悪くなる。ただ先行パーティー(逆コース?)のシュプールがあったため迷うことはなかった。そのまま銚子ヶ峰を越える。銚子ヶ峰の下りもなかなかいいコースである。下り切った頃から視界も回復してきた。銚子小屋付近 12:45。ここで協議し、もう少し頑張ることにする。緩やかな傾斜の稜線をたどり、丸山手前へ。ここで幕営。13:45。

24 日：丸山～芦倉山～大日岳～大日岳スキー場

晴。今日中に下山しようと申し合わせて、5:40 出発。昨日同様クラストした雪にアイゼンが快適に効き、ハイスピードで進み、2 ピッチ目には芦倉山を越してしまふ。この辺りからスキーを付ける。ここは無雪期には絶望的なヤブ尾根らしいが、一旦雪に覆われればなんと快適な「スキー場」になることか。緩い傾斜のアップダウンが続く。一部傾斜のきつい登りもあるが、エッジを効かせて階段登高をすれば問題はない。10:15、我々の見込みよりもはるかに早く大日岳頂上に到着。ここまですればあと一歩。大休止をとる。さあいよいよ大日岳スキー場まで最後の滑降。ということで出発した矢先、スキー場の人々が頂上のお地蔵さんにお参りに登ってきた。そこで出発がわずかに遅れた小野、井上が、お弁当をご馳走になり、さらにはお酒までいただいてしまった。それを知らない山内、細野は一目散にスキー場を目指す。結局小野、井上は 1 時間程遅れて頂上を出発。約

30 分でスキー場のいちばん上に出る。ここでシールを外してゲレンデに突入するが、重荷のため苦勞する。全員がスキー場のいちばん下に集まるのは 13:00 頃。予想通り、居残り組は非難を浴びる。ローツェ(大日岳頂上で会った人の経営するレストラン)で祝杯をあげ、長かった白山スキー合宿を締めくくる。

14. 三つ峠岩登り山行

← 三つ峠を修正

参加メンバー: 外池、井上、高橋

場所: 三つ峠

山では紅葉が美しい季節。6 月から入部した高橋の合宿日数を補うため、個人山行を催し、三つ峠で岩登りを行うことにした。まず、井上、高橋が金曜夜、三つ峠の駅でステーションビバーク。土曜入山。小雨降る中アイゼン登攀の練習をする。その日の夕食はお好み焼きだったが、油(バター)が少なく、中が焼ける前にこげつき、大失敗。焼かずに残った液体は湯に溶いて食おうとするも、食べている途中で人の食うもんじゃないと悟り、テントの外に捨てる。その夜は夜更かしをし、翌日曜日、入山してきた外池に起こされる。外に放たれた液体について「吉祥寺の駅によくまいてあるモンかと思った」とのコメントをつけられた。この日は晴れて、フリーとアイゼンの両方を練習する。この日の夕食には外池がお楽しみとしてアボガドと納豆汁を持って来るが、アボガドは誰もが「まずい」「どこを食うんだ」「僕要りません」等と叫び、納豆汁は履き終えた後の靴下の臭いがして、非難轟々。外池はムッてしまう。翌日もフリーとアイゼンの練習。帰りは夜になってしまい、ヘッドランプやライターを灯して泥道を下山した。

登ったルート: 一般ルート、観音ルート、ジャムトースト、大根おろし、etc。

15. 春合宿偵察山行 (後半)

参加メンバー: 井上、山内、高橋

1 日目: 別当出合～南龍～別山手前 TS

2 日目: TS～三つ峰～銚子ヶ峰～丸山手前 TS

3 日目: TS～丸山～芦倉山～峠より石徹白へ

この山行は東京を出るときより問題の多いものだった。といっても致命的なものはひとつもない。偵察山行ということで、予備段階からいい加減に決めていたからでしょう。高橋がまず待ち合わせ時間に遅れ、大宮からのるはずの「能登」に、高崎までに特急で追い越して乗ることになる。山内は山内で大コッヒェルを忘れるなど、本当にどうなるんだろうという感じであった。別当出合には am10:00 に着く。晴天に恵まれ、その日の目標である別山も展望できる。12:30 には南龍山荘に。そこでデポの点検をし、別山をめざす。ここからが本番と重なるコースである。結局この日は大屏風を越したあたりで幕営する。この日の偵察で、南龍から稜線へ出る時、直接出るのがBESTであることがわかる。夏道沿いでは赤谷をクロスしなければならない。

2 日目である。別山という山は常に東側がなだらかで、雪質さえ良ければスキーが使用できる。御手洗池から銚子ヶ峰へはかなり up-down が連続する。しかし斜度はたいしたことはなく、雪質次第

ではスキーで行ける。朝方、ひざまでのラッセルをしながら別山を越え、それ以外順調に進み、12:00には丸山避難小屋へ着く。そこから状況が一転。丸山までは、地図によると夏道が存在するのだが、Nothing。2mに近い笹林の中を、夏道の5倍ぐらいの時間をかけて、もがく。結局丸山にも行けずに、ダウン。高橋はやけになっている。口数も少ない。

3日目であるが、当然のごとくやぶこぎである。前日後半のスピードはなんら改善されることなく、ただただもがく。スキーで行くには最適の地形というのが、なんとも憎い。芦倉山よりは道なき道が現れ、これをたどりながら峠に向かう。峠には pm4:00 着。芦倉山より展望して、天狗山・大日岳は今までよりもなだらかであることが確認でき、地図よりもそのことは明らかなので、これ以降の偵察はカットすることに決定。私達の心境はまさに to be or not to be というものであった。ここから石徹白方面へ沢を少し下ったところから車道があるので、不安もあったが強行下山することにする。このことは問題もあったが、それほど危険な箇所は地図からは見られなかったので決行した。6:30にはただただ歩き石徹白上に着き、山行終了。高橋にはかわいそうなことをした。

鮎沢政文 冬期登攀記録集

16. 唐沢岳幕岩

期間: 12月28日～1月1日

ルート: 大凹角ルート、畠山ルート、西尾根

28日: 葛温泉 10:10～唐沢出合 11:35～大町の宿

天気はド快晴で気温も高い。黒々とした壁をみて、半ば憤り、半ば安堵しつつ、積雪 30cm ほどの唐沢のトレールを追う。話のタネにと金時の滝を左岸の尾根から高巻いてみたが、急登の連続であるうえに fix ロープのはりめぐらされた岩場が多く、あまりすすめられない。大町の宿に入ると、大凹角ルートを登った鈴鹿 AC の 2 人パーティーが下りてきて、下部壁は見た目よりベルグラがはっていて楽しめるとのことなので、明日は大凹角に行くことにする。

29日: 大町の宿 6:40～大凹角ルート登攀(7:30～14:10)～右稜下降～大町の宿 16:20

天気は終日晴。確かにベルグラははっていたがボルトをおおうほどではなく、アイゼン、手袋で岩のホールドを拾うことに終始した。それでも大ディエードルは凍った草付きにダブル・アックスがよく効いて楽しい。上部壁は夏より乾いて、快適だった。特に問題となるピッチもなく無事終わる。宿に戻ると仙台 AC の 3 人パーティーが大酒宴をやっており、仲間に入れてもらう。もう帰るつもりであったが、ゴチソウに目がくらんだのと酔って気が大きくなったので、明日から 2 ビバークの予定で畠山ルートから山頂往復に付き合うことにする。

30日: 大町の宿 7:15～畠山ルート登攀開始 7:55～大バンド 11:00～1 ピッチ fix し大バンドにてビバークに入る 16:30

雨→ミゾレ→吹雪の最悪のコンディション。4 人パーティーのせいもあり、カタツムリのごとき歩み 3 ピッチで大バンドに達するコロには本格的な吹雪。次のビバーク地大広間テラスまではとてもムリそうなので、流水溝まで 1 ピッチ fix して、大バンドの外傾したテラスで腰掛ビバーク。かなり冷え込

んだが、4 人だと全然悲壮感がない。仙台ACのリーダーの方がわざわざ持ち上げた小型カセットから“バウワウ”のギンギンのロックが幕岩にこだました。この人は軽量化のためとか言ってマットを省いておきながらこんなものを持ってきているので、ア然としてしまった。夜半から満天の星空となる。

31 日：登攀開始 7:45～スベリ台テラスより撤退 14:15～大町の宿 15:55

よく晴れ上がったが、北西風が強く、かなり寒い。ユマールが一組しかなく、昨日 fixしたピッチを一人一人普通に(ロープに頼らず)登り返したのがたたり、トップが、流水溝をナイフ・ブレードのタイオフの連続で苦勞して登りきる頃には、もう 14 時過ぎ。大広間テラスに行くには夜間登攀は避けられそうにないので、あっさり敗退に決める。あれほど苦勞した所も、敗退となると 1 時間足らずで下りてしまい、まったくいやになる。大町の宿には人は急に増え、幕岩のパイオニアの一人。広島山の会の平田恒雄さんを囲んで開拓当時の話などを聞きながら、ヤケ酒を飲んで大晦日の夜を過ごす。

1 日：大町の宿 9:20～(西尾根)～D沢のコル 11:55～唐沢岳 14:20～唐沢出合 17:30～葛温泉 18:55

今日も快晴だが、冷え込みは厳しい。天気もいいし、元旦だし、と言うことで、鮎沢、仙台AC3 人、広島山の会 2 人で西尾根から唐沢岳を往復することにする。5 月に一度このルート进行をトレースしたことのある鮎沢が案内役をつとめさせられたが、その実態はラッセルマシーンであった。天気が良いので頂上からの展望はサイコー。ついでに平田さんが「わしの行動食はいつもこれじゃけん！」とくれたもみじまんじゅうもサイコー。幕岩で新たに知り合った岳人たちともっと登りたかったけれど、この日が最終下山日だったので、鮎沢は一人唐沢をかけ下り、暗くなる頃高瀬ダムに着いた。本当に楽しく思い出深い山行だった。

17. 唐沢岳幕岩

期間：3 月 22 日～25 日

参加メンバー：丸野(アスペン・クラブ)、鮎沢

ルート：下部山嶺第 2 ルート～上部大凹角ルート

22 日：二ツ玉低気圧ヶ通過し、3 月の降雪としてはここ 10 年で最高という大雪。シンシンと降り積もる雪の中、山の神トンネルに入ったとたん、トンネル入り口の雪壁がゴウ音とともにナダれる。モノもいわずにとって返し、七倉の補導所の軒下にツェルトをはって停滞。七倉周辺は終日ナダレの音が響いていた。

23 日：七倉 5:45～唐沢出合 6:35～大町の宿 12:05

天気は曇りから晴、唐沢の雪崩はこの時期としては異例の新雪雪崩となって落ち尽くしていたようだが、ラッセルは非常にきつく、ももから腹までである。壁も上部壁以外は雪壁かとみまちがうくらいに真っ白。ワカンを持って来なかったことをくやみつつ、ヘロヘロになって大町の宿に入り、日本全国のクライマーはどこに行ったのだ、とクダをまいて酒宴をはる。

24 日：大町の宿 6:35～山嶺第 3 ルート登攀開始 7:50～中央バンドビバーク 17:50

天気は終日快晴。とにかく壁の状態が悪いので、人工主体の山嶺第2ルートに取り付く。取り付きまでのラッセルも非常にしんどく、前途多難。冬期開拓されたルートなので、箱型ハングまでは雪落とし以外にさしたる困難もなく、アブミのかけかえと部分的にシビアナ草付きのダブルアックスで達せられた。しかし、箱型ハングをこえてひょいとのぞいてみた第2スラブには新雪が30cmほどの厚さでベツリとついて、ボルトのありがたかわからん！アブミの最上段に乗り、ピッケルをムチャクチャにふって次のボルトを探すという気の遠くなる作業を続けて前進するが、ボルト・ラダーが右上し出すらしいところから、ボルトがどうしても見つけられず、やむなくスラブの上のった雪をだましましたましてフリーに移る。まず手で固め、次にヒザで固め、そお一つと足を置いて右手のブッシュ帯に向けてトラバースする。太陽の照り返しと、いつくずれるかわからない雪への恐怖感とから、ノドがカラカラになり、叫び出したくなるが声も出ない。ブッシュ帯まであと3mほどというところで、スラブの傾斜が増して雪が薄くなり、フリーでは行けず、しかたなく(内心では喜んで)ボルトを一本埋めて、振り子トラバースしてブッシュ帯に入る。

鮎沢の数少ない冬期登攀の中で、まちがいなく最悪の部類に入るピッチだった。後はインゼル状のブッシュ帯をひたすらラッセルして中央バンドに達し、雪壁を切り崩してビバーク。余りの疲労に食が進まず、紅茶ばかり「ウメー」を連発してむさぼり飲む。

25日:ビバーク地 6:15～(上部大凹角ルート)～右稜の頭 10:20～(右稜下降)～大町の宿 13:05～七倉 16:40

天気はくもりから雪。悪天が予想されたので、唐沢岳から燕への縦走はアッサリ放棄し、今日中下山すべく、上部は勝手知ったる大凹角ルートに行くことにする。ビバーク地から20mのラッセル、40mのトラバースで大凹角に入る。12月の時とは違って格段に悪く、ナッツやナイフ・ブレードを多用して何とか終わる。右稜を下降し、大町の宿に帰り着く頃には再び本格的な降雪となり、また雪崩に閉じ込められかねないので、ただちに下山した。今山行でいちばん感心したのは、酔っぱらって大系線の車内にピッケルを忘れながら、アイス・ハンマー一本で冬の幕岩を完登した丸野さんの根性です。

18. 南ア仙丈岳 岳沢(単独)

← 千丈岳を修正

期間:3月9日

敗退続きから立ち直るべく、今冬の寡雪で雪崩はないと判断してあえてこの時期に岳沢に入った。たしかに雪崩の危険はなかったが、気温が異常に高く、岳沢越までの小沢は雪解け水がとうとうと流れ、岳沢自体もF1の氷結が悪く、これ幸いとばかりにその日のうちに下山して帰京してしまったのでした。あのあたりはさすがに山深く、カモシカを2頭も見したが、帰りにトボトボと林道を歩いていると、上の方から猿に石を落され、激しく怒り活おちこんでしまった。

19. 黒部丸山(単独)

期間:4月3日～5日

ルート:大チムニールルート

なぜか4月になると丸山が恋しくなる。2年前の4月、社会人に連れられて、黒部の雪崩の洗礼を受けながら、緑ルートに登って以来、この時期になるとなぜか雪に埋もれた黒部川を歩きたくなる。というわけで、今年はこの1月に冬期初登されたばかりの大チムニールートの単独初登を狙って東京を発ったのですが…。

3日：信濃大町 14:20～扇沢 18:20～黒部ダム 19:30

いきなり寝坊して、立川で電車に乗り遅れて大町のバスに乗れず、タクシーに乗る金もないので、20数km歩いて懐かしの黒部ダムへ。不安と期待でまんじりともせず。

4日：黒部ダム 4:25～丸山東壁左岩稜末端デポ 6:05～大チムニー登攀(7:10～11:55)～デポ地(内蔵助平往復)

雪崩を懸念するあまり、ヘッドランプをつけてダムを出たが、明るくなってあたりを見渡すと、5月の山という感じで、丸山谷・丸山小谷の雪崩も落ち尽しているようだった。丸山東壁も殆ど夏壁だが、大チムニーだけは中央バンドまで氷がはりつめている。1P目(夏の2P目)、ボルト3本の人工から、カッティングとダブルアックスで夏のオフヴィズスに入り、ダブルアックスで直上、細いバンドをトラバースして効き悪く間隔の遠いピトンの人工でチムニー左壁を登り、今にも崩れそうな雪塊の上を伝って再びチムニー内に戻る。45m。2P目、もろい岩、効きの悪い支点、上部からの融水に苦しみ、もうやめようと何度も思いながら、単独初登の名誉に目がくらんで何とか前進する。40m。3P目。融水はいよいよひどく、岩も苔むしてボロボロ。その上、中央バンド直下に威圧的な氷柱がかかり、アイスピトンも2本しかないので敗退を決意。ぬれネズミとなってデポ地に戻る。このまま帰るには惜しいくらい天気が良いので、白銀の内蔵助平まで足を延ばし、雪の黒部を満喫する。左岩稜末端の小シュルンドでビバーク。

5日：天気が下り坂なので、黒部の雪崩はハンパじゃないけん、と一人納得してやっと芽を出したフキノトウを摘みつつ下山する。今年の雪シーズンも、結局課題を残すだけで終わってしまった。

20. ヨセミテ

掲示を見てやって来た待望のパートナー、34才のアメリカ人の技師ロジャーと「ゾディアック」に再トライをかける。今日はお互いの力量を把握するということで、2ピッチフィックスして下降。経験豊富そうで、慎重かつ安定した登りをするが、何かあると「Oh, Boy」と言って人の頭をなでるのはやめてほしかった。今年は異常気象なのか、10月に入ってもあまり気温が下がらず、この日も真夏の様な日射だった。

10月16日曇

取り付く前に一日おいて気分転換ということで、一人でワン・デイ・ハイクに出かける。4マイル・トレイル～グレイシャー・ポイント～パノラマ・トレイルとよく整備された道を、秋のバレー・フロアーのすばらしい展望を楽しみながら快調に歩く。ヨセミテに来た頃には、日本の大学生のナンパ用語だという先入観があっても言えなかった「ハーイ」という挨拶がやっと出来るようになり、人と会うと自然に口から出るのには我ながら驚いた。

10月17日晴(日中暑い)

「ゾディアック」7P 目のテラスでビバーク。人気ルートなので残置が増えてグレード・ダウンしているとは言え、ラープやスカイフックを使う A3 のピッチはただただ怖い。また、ボルトラダーと言っても、ネジを切った軸(挿絵)が埋め込んであるだけで、ここにハンガーをかけて六角ナットで締めなければならない。土方の次は“垂直の機械工”である。苦労して荷揚げしただけあって、夕食はジュース、パスタ缶、フルーツ缶、ドライフルーツと豪華である。こちらの缶詰は、パスタ、ビーンズ、野菜、肉、魚と種類も豊富で味もよく、日本の下宿住まいの貧乏学生には大受けしそうだ。

10月18日晴(日中猛暑)

A3 が連続して 3 ピッチしか進めず、10P 目の終了点でポータレッジを吊ってビバークする。残置が多くなっても、それがみなコパーヘッドではちっとも気が休まらない。10P 目を登攀中に、右横の「ルナー・エクリプス」というルートの上部の大フレーク(高さ 40m ほど)が大音響とともに崩壊して落下し、南東壁へのアプローチとなるガリーに激突して岩雪崩となった。一部始終を目撃しブルブル震えながら、「ゾディアックを無事終わられたら岩登りはやめよう」と真剣に思った。ポータレッジの上で寝返りをうつと船がゆれたときのような不快感があり、好きになれない。」

10月19日曇

今日も A3 が続いて 3P 止まり。エキスパンディング・フレークが多く、ピトンを強くたたき込めず、シン・ストッパーや RP を多用する。13P 目のテラスは少々小便臭いが、真っ平なので快適に手足を伸ばす。登攀中はいいが、ビバークに入ると、私の不自由な英語のために会話が弾まず空気が重い。日本に帰ったら英会話を勉強しよう……。

10月20日晴

さしもの「ゾディアック」も最後の 3 ピッチはやや易しくなり、お昼すぎに抜けることができた。最終ピッチをユマーリングしてゆくと、ロジャーはナニ丸出しで日光浴をしていた。イースト・レッジを下り、3 回ラッペルで安全圏に達した時、これで生きて日本に帰れる、と初めて喜びがこみあげてきた。

10月25日曇

「ゾディアック」の後、お決まりのバカ食いばか飲みが数日続き、もういい加減日本に帰ろうかとも思ったが、「Climbing」誌に載った「サラテ・ウォール」フリー化の写真を見ると、根が単純なもので直ぐに影響され、まだしつこく居残っていたハード・フリー・クライマーの S 氏と T 氏と語らって出かける。この日は 10 ピッチ登ってマンモス・テラスでビバーク。傾斜が緩いので 3 人 X4 日分 24 リットルの水の詰まったボール・バッグを上げるのが一苦労だった。3 本目ともなると、荷揚げ、クリーニングも手慣れてきた感じである。

10月26日曇/快晴

「サラテ」20P 目終了点のテラスでビバーク。「ホロー・フレーク」、「ザ・イヤー」など、プロテクションのとれぬままにランナウトしてしまう恐ろしいワイド・クラックが多くまたもや「岩登りはやめえよう」の誓いをたてる。ビッグ・ウォールを登るにはワイド系の技術が不可欠だと身にしみて納得。朝明るくならないと起きないので、最終の 2 ピッチはヘッドライト登攀となり、21:30 ようやくビバークに入る。

10月27日曇/快晴

「サラテ」20P 目の「ザ・ブロック」のテラスに達してから、「ザ・ルーフ」下まで3ピッチ、フィックスしてビバーク。「サラテ」のクラックは「ザ・ノース」のに比べるとフレアーしておらずきれいで、ナッツ、フレンズが気持ちよく効く。

10月28日曇

フリー化メンバーの一人、ポール・ピアナが「ここ(ヘッド・ウォール)に居るということはフリーによるのであれ、エイドによるのであれ、クライマーの体験し得る最もすばらしい体験の一つだ」と書いていた通り、ヘッド・ウォールに一直線に走るクラックは本当に美しく、これを見るためにだけでもこのルートに取りついてよかったと思った。日没直前に抜け、イースト・レッジを速やかに下降し、閉店間際のビレッジ・ストアーに駆け込んで、ビールとステーキ用の肉を買うことができた。

10月30日

夕焼けに染まるエル・キャップの南西壁に見送られて、ヨセミテ・バレーに別れを告げた。

そして・・・

日本に帰ってからもう10日もなるのに、いまだに私はビッグ・ウォール・シンドロームから抜けやらず、毎日部室でゴロゴロしてシュラフから出ようとせず、「日本は寒い、食いものが高くてまずい」と文句ばかりつけて、「サルサ食いてー」とわめいているので、現役部員からは白い目で見られている今日この頃です。

終りに――ヨセミテ・クライミングへの誘い――

今回ヨセミテのクライミングを体験してみて一番感心させられたのは、向こうの連中の、とにかくクライミングを楽しもうとする姿勢でした。下は腹の出たオジサンから上はワシントンコラムのアストロマンをフリーソロしたピーター・クロフトまで、各人がそれぞれのレベルに応じて目一杯クライミングを楽しんでいました。別な言い方をすると、どうせ登るなら楽しまにや損々ということでしょうか。「ゾディアック」を終えてエル・キャップ・メドウの駐車場に降りてきた時、現在エル・キャップで最難のルートと目されている「シー・オブ・ドリームス」(VI5.9A5、「if you fall, you die」というピッチを含むことで有名)にこれから取り付く連中に会いました。「恐くないのか」と聞くと、「怖い、でも俺たちにはこれがある」と、ちっとも恐くなさそうに、ステレオ・カセット・デッキをたたいて見せました。完登後のビールとステーキだけを楽しみにして、登攀中は緊張と恐怖でブルブル震えているようでは、A4とかA5のグレードのついた一週間以上かかるルートはとて登れないな、と思いました。

もう一つには、クライミングにおけるタクティクスというものの重要性を認識させられました。たとえばショート・ルートでは、クラックが主体のヨセミテでは登りながら自分でナッツ類をセットしていかねばならず、ボルトで安全を保証されたフェース系のクライミングと違って、ムーブだけに集中する事ができません。よってムーブの組み立ての他に、ギアの選択とか、どこでどうレストイングしてプロテクションをセットするかというタクティクスがとても重要になります。ビッグ・ウォールでは、さらに壁の中で壁の中でどう食はどう眠るかの生活技術が加わって、タクティクスの重要性はますます大きなものになります。向こうの連中の大胆なクライミングは、決して日本人流の神風精神から出たのではなく、緻密なタクティクスの裏付けがあってこそ可能になるのだと思いました。ヨセミテ

のクライミングは、日本の岩場ではまず学べない合理的な岩登りの知識と技術を教えてくれるし、何よりもそれ自体すばらしい体験だと思います。大学山岳部の皆さんで、ハード・フリーとビッグ・ウォールの接点を模索している方、日本の本チャンでは飽き足らない方、上級生にしごかれ、何とか岩登りが上手くなって見返してやりたいと思っている下級生の方、ぜひヨセミテを訪れてみてください。きっと求めているものが見つかると思います。5.10 や 5.11 が登れなければ・・・なんて言うのは見当違いもはなはだしい。むしろ初心者ほど、向こうでゼロから始めたら、上達が早く正しい知識を習得できると思います。そういう点では、ヨセミテで岩登り合宿なんていいアイデアだと思います。(現にソウル大学の山岳部はこれをしており、「サラテ」、「トリプル・ダイレクト」「ノーズ」からエル・キャップを集中登攀していました)。

さて、気になる支出ですが、私の場合今回は、航空運賃は別として 1500 ドル(1ドル 130 円として 19 万 5 千円)をトラベラーズ・チェックで持ってゆき、向こうで 2 カ月分の生活費の他にエイド用のギア(約 400 ドル)購入に支出しましたが、帰って見たら充分お釣りが来ました。私はかなりエピソードしてしまっただけで食費がかさみましたが、ストイックな人ならいくらでも節約できるでしょう。では、ヨセミテですばらしいクライミングを！ (文責 鮎沢)

22. ゲレンデ山行状況

5/29	広沢寺	引地 OB、鮎沢、井上、秋山(井上の友人)
6/22	広沢寺	鮎沢
7/21	越沢バットレス	鮎沢、小野、井上、夏合宿に向けてトレーニング
7/31	久須美の岩場	鮎沢、三浦(星稜登高会)
8/21	鷹取山	鮎沢、三浦
8/27	城ヶ崎	鮎沢、三浦

Free talk

編集後記にかえて

by 小野

★この報告書の作成にあたって、私は原稿をワープロで清書する役割を引き受けてしまいました。最初、岩原と内藤の原稿から手を付けましたが、この両君の原稿は(6 枚)はすぐ終わったので、「軽い、軽い」と思いつつ、楽しみつつ作業を進めていました。ところが災難はその後直ぐにやってきた。鮎沢氏の原稿である。細かい字で 8 枚。彼の原稿 1 枚はほぼこの報告書 2 ページに相当します。相当の時間作業したからかなりできただろうと思ってふりかえると、「えー、まだ 1 枚？」といった感じ。鮎沢氏もよくこれだけの量の文章を書きましたね。清書を引き受けた事を後悔しつつ…。だが難所はこれ以外にもあった。最後に残ったのが井上さんの執筆した夏合宿の原稿である。四百字詰め原稿用紙だからすぐできる、と思いきや・・・これは原稿というよりは草稿である。まったく・・・。

★フリートーク書こうなんて言い出したのは一体誰やネン。鮎沢氏以外誰も出てンがな。何考えて

んや、どつくで、ワレ。

★某社から送られてきた恋人リサーチのこと。「<コンピュータ・ラブリサーチ>の結果 貴方に最適なパートナーが選ばれました。」とか。勝手に決めんな、アホ。原理研の集団結婚を想起させるではないか。そもそも私は申し込んでなんかいない。それなのに、私からの申し込みによってこんなモノをお送りしました、とおっしゃる。誰や、こんなイタズラをしたのは。さっそく断りのはがきを返送しました。そのはがきの、入会しない理由の欄に「既に親しい異性の友人がいる」というのがあったので、迷わずこれに○をつけました。……。

この夏の遭難事故から、早くも3ヶ月あまりが過ぎ去った。この報告書を作りながらも、山の厳しさ、非情さを再確認させられる。山に登るものは、常にこのことを肝に銘じていなければならない。この報告書は故細野伸二君がしるした最後の足跡である。もう二度と事故は起こさぬという誓いを新たに、この報告書を、故細野伸二君の霊前に捧げる。合掌。

1988年11月18日

一橋大学山岳部